

特101
307



始

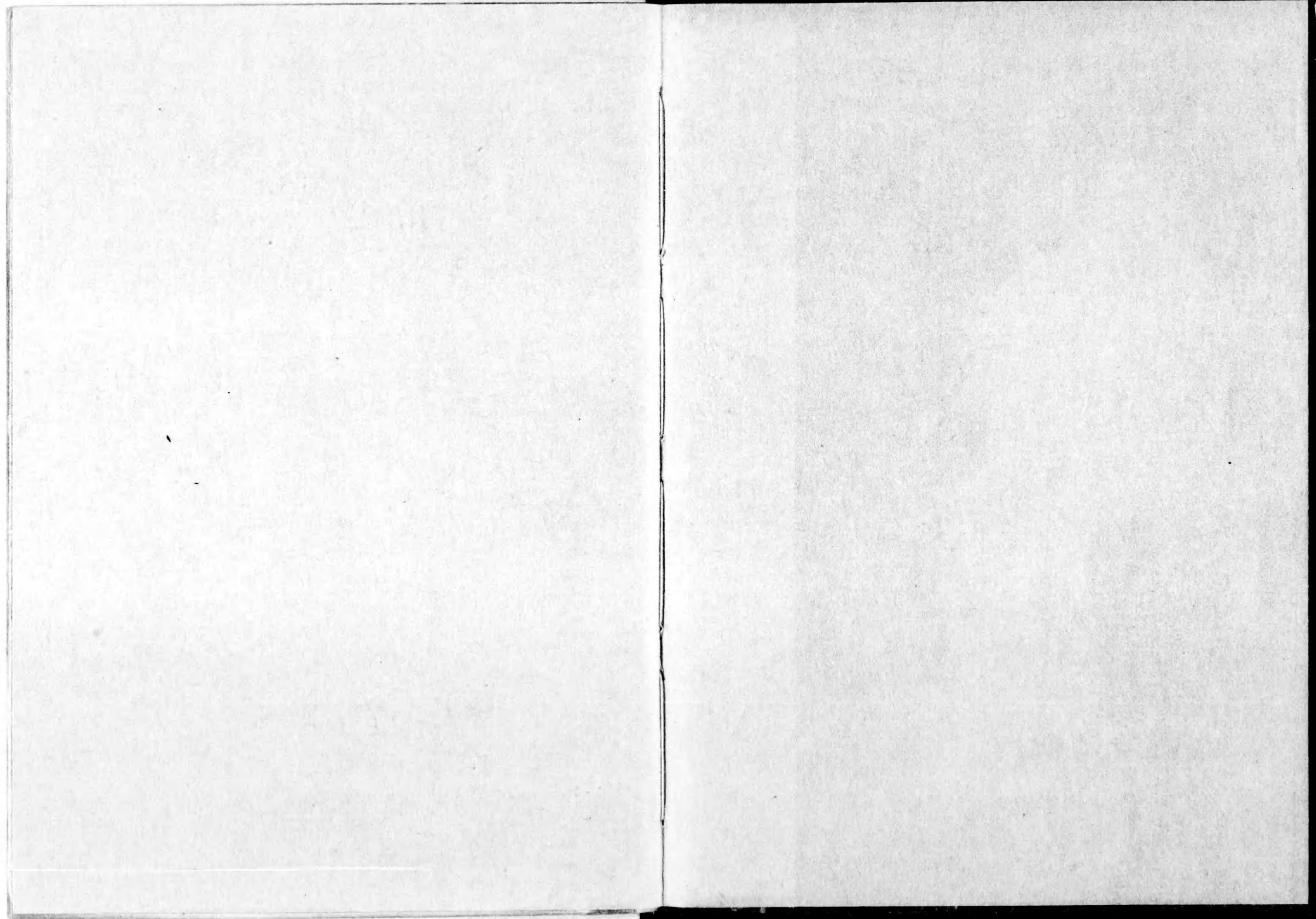




さくあれずわ

秋

Label with illegible markings





のすれなぐさ

抒情小詩選

大正
4. 5. 7
内交

わすれえぬひとびとに

特 101
307

選 詩 小 情 抒

さぐなれすわ

著 秋 白 原 北

幀 裝 及



京 東

店 書 術 藝

房 書 陀 蘭 阿

はしがき

少年老い易し、麗人は刻を千金の春夜に惜む。われらがわかき日の小詩はまさに涙を流して歌ふべし。瑠璃いろ空のかはたれにわすれなぐさの花咲かばまた、過ぎし夜のはかなき戀も忍ぶべし。ここ

に選び出でたるはわが幼きより今にいたるあらゆる詩集の中より、ことに歌ひ易く調しらべやさしき斷章小曲のかずかず、すべてみな見果てぬ夢の現なかりしささやきばかり、とりあつむればあはれなることかぎりなし。かの西の國の詩人うたびとが

ながれのきしのひともとは

みそらのいろのみづあさぎ

なみことごとくくちづけし

はたことごとくわすれゆく。

と歌ひけむ。なにごとみながれゆく水のながれのひとふれのみ。忘れえぬ人びとよ、われらが若さは過ぎなむとす。嘆かば嘆け。羊の皮の手ざはりに金の箔押すわがこころ、思ひあがればある時は、紅玉ルビーサファイヤ、エメラルド綠玉、ダイヤモンド金剛石をも鏤うづらめむとする、何といふ哀あはしさぞや、るりいろ空に花咲かば忘れなくさと思ふべし。

大正四年四月

白 秋 識

わすれなぐさ目次

あかき木の實

あかき木の實	三
硝子切るひと	四
日ごとに	六
黄金ひぐるま	七
かへりみ	八
わすれなぐさ	九
よひやみ	一〇
わかき日のゆめ	一二

断章

一、今日もかなしと思ひしか	一五
---------------	----

二、ああかなしあはれかなし……………一六
 三、ああかなしあえかにもうらわき……………一七
 四、あはれわが君おもふ……………一八
 五、暮れてゆく雨の日の……………一九
 六、あはれ友よわがき日の友よ……………二〇
 七、見るとなく涙ながれぬ……………二一
 八、女子よ汝はかなし……………二二
 九、あはれ日のかりそめのものなやみ……………二三
 十、あはれあはれ色薄きかなしみの葉かげに……………二四
 十一、酒を注ぐ君のひとみの……………二五
 十二、女汝はなにか欲りする……………二六
 十三、惱ましき晩夏の日……………二七
 十四、わが友よ……………二八
 十五、あはれ君我をそのこと……………二九

十六、哀知る女子のため……………三〇
 十七、口にな入れそ……………三一
 十八、われは思ふかの夕ありし音色……………三二
 十九、ああさみしあはれさみし……………三三
 二十、大空に入日のこり……………三四
 二十一、いとけなき女の兒……………三五
 二十二、わが友はいづこにありや……………三六
 二十三、彌古りて大理石……………三七
 二十四、泣かまほしさにわれひとり……………三八
 二十五、柔かきかかる日の……………三九
 二十六、蟬も鳴くひと日ひれもす……………四〇
 二十七、そを思へばほのかにゆかし……………四一
 二十八、あはれあはれすみれの花……………四二
 二十九、梅の果に金の日光……………四三

三十、あはれさはうち鄙びたる……………四四
 三十一、いまもなほワグネルの調に……………四五
 三十二、わが友は……………四六
 三十三、あはれ去年病みて失せにし……………四七
 三十四、あはれあはれ青にぶき救世軍の……………四八
 三十五、縁日の見世ものの……………四九
 三十六、鄙びたる鋭き呼子……………五〇
 三十七、あはれあはれ色青き幻燈を……………五一
 三十八、瓦斯の火のひそかにも……………五二
 三十九、忘れたる忘れたるにはあらねども……………五三
 四十、つれのごと街をながめて……………五四
 四十一、かかるかなしき手つきして……………五五
 四十二、あかき實は草に落ち……………五六
 四十三、葬のかへさにか……………五七

四十四、顔の色蒼ざめて……………五八
 四十五、長き日の光に倦みて……………五九
 四十六、かなしかりにし昨日さへ……………六〇
 四十七、廢れたる園のみどりに……………六一
 四十八、なにゆゑに汝は泣く……………六二
 四十九、あはれ人妻……………六三
 五十、いかにせむ……………六四
 五十一、色あかき三日月……………六五
 五十二、柔らかなる日ざしに……………六六
 五十三、われは怖る……………六七
 五十四、いそがしき葬儀屋のとなり……………六八
 五十五、明日こそは面もあかめず……………六九
 五十六、色あかきデカメロンの……………七〇
 五十七、あはれ鐵雄……………七一

五十八、ほの青く色ある硝子……………七二
 五十九、薄青き齒科醫の屋に……………七三
 六十、あはれあはれ灰色の線路にそひ……………七四
 六十一、新詩社にありしそのかみ……………七五
 六十二、かくまでもかくまでも……………七六
 六十三、かかる窓ありとも知らず……………七七
 六十四、わかうどのせはしさよ……………七八
 六十五、夕ぐれのものあかき空……………七九
 六十六、夕日はなやかに……………八〇
 六十七、美しくしきソフイヤの君……………八一
 六十八、失くしつる……………八二

酒の徴

一、金の酒をつくるは……………八五

二、からしの花の實になる……………八七
 三、酒袋を干すとして……………八八
 四、酩酊り唄のこころは……………八九
 五、麥の穂づらにさす日か……………九〇
 六、人の生るるもとすら……………九一
 七、からしの花も實となり……………九二
 八、櫛の實採の來る日に……………九三
 九、ところも日をも知らねど……………九四
 十、足をそろへて磨ぐ米……………九五
 十一、ひねりもちのにはひは……………九六
 十二、かすかに消えゆくゆめあり……………九七
 十三、さかづきあまたならべて……………九八
 十四、その酒のその色のにほひの……………九九
 十五、酒を醸すはわかうど……………一〇〇

見果てぬ夢

十六、ほのかに忘れがたきは……………一〇一
 十七、酒屋の倉のひさしに……………一〇二
 十八、カンカンに身を載せて……………一〇三
 十九、悲しきものは刺あり……………一〇四
 二十、目さままし時計の鳴る夜に……………一〇五
 二十一、わが寝る倉のほとりに……………一〇六
 二十二、倉の隅にさす日は……………一〇七
 二十三、青葱とりてゆく子を……………一〇八
 二十四、銀の釜に酒を湧かし……………一〇九
 二十五、夜ふけてかへるふしどに……………一一〇

消芙蓉……………一一三
 見果てぬ夢……………一一四

片戀

初戀……………一一六
 あかき林檎……………一一七
 水蟲の列……………一一八
 カステラ……………一一九
 ふるさと……………一二〇
 泣きにしは……………一二二
 時は逝く……………一二四

片戀……………一二七
 芥子の葉……………一二八
 春の鳥……………一三〇
 あらせいとう……………一三一
 あひびき……………一三二

巡禮……………一五一

薔薇の木……………一五五

日光……………一五六

麗日展望……………一五八

佇立……………一五九

やさい……………一六〇

ながは……………一六一

かぜ……………一六二

ながめ……………一六三

つなご……………一六四

海雀……………一六五

あそびめ……………一三四

うつそみ……………一三九

罪びと……………一四〇

野晒……………一四二

なまじおもへば……………一四三

涙……………一四三

眞實……………一四四

自愛……………一四五

二人で居たれど……………一四六

幻滅……………一四七

ふたつの鏡……………一四八

肖像……………一四九

現……………一五〇

あかき木の實

あかき木の實

暗きところのあさあけに、
あかき木の實ぞほの見ゆる。
しかはあれども、晝はまた
君といふ日にわすれしか。
暗きところのゆふぐれに、
あかき木の實ぞほの見ゆる。

硝子切るひと

君は切る、

色あかき硝子の板を。

落日さす暮春の窓に、

いそがしく選びいでつつ。

君は切る、

金剛の石のわかさに。

尚香酒のどときひとすぢ

つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、

色あかき硝子の板を。

君は切る君は切る。

日ごと

日ごとにはわかき姿して
日ごとに歌ふわがどちよ、
日ごとに紅き實の乳房
日ごとにすてて漁りゆく。

黄金向日葵

あはれ、あはれ黄金向日葵
汝また太陽にも倦きしか、
南國の空の真晝を
かなしげに疲れて廻はる。

かへりみ

みかへりぬふたたびみたび、
 暮れてゆく幼の歩
 なに惜しみさしもたゆたふ。
 あはれまた野邊の番紅花
 はやあかきにはひに満つを。

なわすれぐさ

面帕のうしろに見えて、
 その眸にほふごとくも、
 空いろに透きて葉かげに
 今日も咲くなわすれの花。

目見^ましらみ、うすらなやめば
 あまき香^かもつゆにしめりぬ。
 さあれ、きみ、こひのうれひは
 よひのくち、それもひととき、
 かなしみてあらばありなむ、
 われもまた、一月はのぼれり。

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ、
 よひやみのうれひきみにも
 ほの沁^ひむや、青みやつれて
 木のもとに、みればをみなも。
 な怨^{うら}みそ。われはもくせい、
 ほのかなる花のさだめに、

わかき日の夢

水透ける玻璃のうつはに、
果のひとつみづけるごとく、
わが夢は燃えてひそみぬ。
ひややかに、きよく、かなしく。

断章 六十八

一

今日もかなしと思ひしか、ひとりゆふべを、
銀の小笛の音もほそく、ひとり幽かに、
すすり泣き、吹き澄ましたるわがこころ、
薄き光に。

二

ああかなし、
 あはれかなし、
 君は過ぎます、
 薫^くいみじきメロデアのにはひのなかに、
 薄^うれゆくクラリネットの音^ねのさどく、
 君は過ぎます。

三

ああかなし、
 あえかにもうらわかきあわわが君は、
 ひとつもとの芥子の花そが指に、香^かのくれなるを
 いと薄^うきうれひもてゆきずりに觸^ふれて過ぎます。

四

あはれ、わが君おもふ井オロンの静かなるしらべの
なかに、
いつもいつも力なくまぎれ入り、鳴きさやぐ驢馬の
にほひよ、
あはれ、かの野邊に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、
あはれ、あはれ、酸ゆき日のなげかひをわれひとり嗅
ぎそめてより。

五

暮れてゆく雨の日の何となきものせはしさに
落したる、さは、紅き實の林檎、ああ、その林檎、
見も取らず、冷やかに行き過ぎし人のうしろに、
灰色の路長きぬかるみに、あはれ濡れつつ
ただひとつまるびたる、燃えのこる夢のどとくに。

六

あはれ友よ、わかき日の友よ、
今日もまた街にいでて少女らに面染むとも
な嘲みそ、われはなほ心はなほ心をさなく、
やはらかき山羊の乳の香のいまも身に失せもあへ
ねば。

七

見るとなく涙ながれぬ。
かの小鳥
在ればまた来て、
茨のなかの紅き實を啄み去るを。
あはれました、
啄み去るを。

八

女子よ、

汝はかなし、

のたまはぬ汝はかなし、

ただひとつ、

一言のわれをおもふと。

九

あはれ、日の

かりそめのものなやみなどてさはわれの悲しく、

窓照らす夕日の光さしもまた涙ぐましき、

あはれ、世にわれひとり残されて死ぬとならねど、

わが側遠く去るとも人のまた告げしならねど、

さなり、ただ、かりそめのかりそめのなやみなるにも。

十

あはれ、あはれ、色薄きかなしみの葉かげに、
 ほのかにも見いでつる、われひとり見いでつる、
 青き果みのうれひよ。
 あはれ、あはれ、青き果のうれひよ。
 ひそかにも、ひそかにも、われひとり見いでつる
 あはれその青き果のうれひよ。

十一

酒を注つぐさみのひとみの
 ほのかにも濡れて愁うれふる。
 さな病みそ街まちのどよみの小夜さよふけて遠く沁しみむとも。

十二

女、汝はなにか欲りする。

ゆふぐれのゆふぐれのゆめふかきもののにほひに、
かくもまた汝とともに接吻けて接吻けて接吻けて

ほのかにも泣きつつあらば、

あはれ、また、なにの願か身にあらむ、ああさるをなほ、

女、汝はなにか欲りする、

ゆふぐれのゆふぐれのふたつなき夢のさかひに。

十三

なやましき晩夏の日に、

夕日浴び立てる少女の

餘念なき手にも揉まれて、

やはらかににじみいでたる

色あかき爪くれなるの花。

十四

わが友よ。

君もまた色青きペバミントの酒に、

かなしみの酒に、

いひしらぬ慰藉なぐさのしらべを、

今日の日のわがごとくも、

あはれ、友よ、思ひ知り泣きしことのありや。

十五

あはれ君、われをそのごと

清しとな正しとなおもひたまひそ。

われはただ強ひて清かり。

失せもあへぬそのかみの日の怯おそれたる弱きこころ
に。

ああかなし、われはさは強ひて清かり。

十六

哀^{あはれ}知る女子^{をんな}のために、
 われはいま黄金^{こがね}なす向日葵^{ひるまき}のもとにうたふ。
 哀^{あはれ}知る女子^{をんな}のために。

十七

『口^{くち}にな入れた。』
 色^{あな}紅^{あか}くかなしき莓^{もも}葉^はかげより今日^{けふ}も呼びつる。
 『口^{くち}にな入れた。』

十八

われはおもふかの夕ありし音色を。

いと甘き梶の映えあかるにほひのなかに、

埋れつつ愁ふともなくただひとりありけるほどよ、

哀れさは通りすがりのちやるめらの肩をかへつつ、

ひとうれひ——ひいひゆるへうと荷擔夫の吹きも

ゆきしを。

哀れまた夕日のなかに消えがてに吹きも過ぎしを。

十九

嗚呼さみし、哀れさみし。

今日もまた都大路をさすらひくらし。

なにものか求めゆくとしてさすらひくらし。

日をひと日ただあてもなうさすらひくらす。

嗚呼さみし、哀れさみし。

二十

大ぞらに入日のこり、
 空いろにこころ顛ふ。
 初戀の君をおもふ
 われの未練^{みれん}ぞ、
 あはれさは暮れはつるらむ。

二十一

いとけなき女の子に
 きかすとはあられど、
 たはむれにきかしぬる
 わかき日の歌よ。
 わが戀ふる君も知らねば。

二十二

わが友はいづこにありや。

晩秋の入日のあかさ、さみしらにひとり眺めて、
掻いさぐるピアノの鍵の現なき高音のははり。
かくてはや、獨身の、獨身の、今日も過ぎゆく。

二十三

彌古りて大理石はいよよ眞白に、
彌古りてかなしみはいよよ新らし、
彌古りて彌清く、いよよかなしく。

二十四

泣かまほしさにわれひとり、
 冷やき玻璃戸に手もあてつ、
 窓の彼方はあかあかと沈む入日の野を見ゆる。
 泣かまほしさにわれひとり。

二十五

柔かきかかる日の光のなかに、
 いまひとたびあはれいまひとたび、
 ほのかにも洩らしたまひね、
 われを戀ふと。

二十六

蟬も鳴く、ひと日ひねもす、

『かなし、かなし、ああかなし、今日^{けふ}なほひとり。』

二十七

そを思へばほのかにゆかし。

その古りし朱塗^{しゆぬり}のうつは、

そがなかに薫^{くゆ}りにし

馬尼拉^{マニラ}煙草^{たばこ}よ。

いつの日のゆめとわかねど。

二十八

わはれ、おはれ、すみれの花よ。
 しをらしきすみれの花よ。
 汝はかなし、
 色あかき煉瓦の竈の
 かげに咲く汝はかなし。
 はや朝明の露ふみて
 われこそ今し妹の骨ひろひにと來しものを。

二十九

青梅に金の日光り、
 地は濡れて鈴蟲鳴く。
 日暮らしの日暮らしの雨の絶間に、
 いつしらず鈴蟲鳴く。

三十

あはれさはうち鄙ひなびたる
 いはけなき玉乗の子が危あぶなげの足にあはせて、
 かすかにも弾き鳴らす并オロン弾きの少女。

三十一

いまもなほ
 フグネルのしらべに
 日をひと日浮身をや窠やちしたまへる。
 かなしきは女ぞかし。
 離さかり来て野邊のにおもへば
 露くさの花の色だにさはひとり求とめわぶるなる。

三十二

わが友は色あかき酒を飲みにし、
 われはサイダア、
 あはれかかる淡つけき愁もて
 わかき日をや泣かむとする、弱き子の心ぼさよ。

三十三

あはれ、去年病みて失せにし
 かのわかき辯護士の庭を知れりや。
 そは、街の角の貸家の
 襦めはてし飾硝子の戸を覗け、草に雨ふり、
 色紅き罌粟のひともと濡れ濡れて燃えてあるべし。
 あはれまた、そのかみの夏のごとくに。

三十四

ああ、あはれ、
 青にふき救世軍の
 汚よれたる硝子戸のまへに
 向日葵ひまわり咲き、
 濠端はりばたを半纏はんてんひとりペンキ壺かじさげて過ぎゆく。
 いづこにか物賣の笛、
 ああ、ひと目——日の夕、
 われはいま忙せわしなの電車より。

三十五

縁日えんじちの見世ものの臭くさき瓦斯にも面おもてうつし、
 怪しげの幕のひまより活動寫真くわつどうの色は透かせど、
 かくもまた廉白粉れんぱくの人込ひとごみのなかもありけど、
 さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなさ、涙な
 がる。

三十六

鄙ひなびたる鋭とがき呼よ子こそをきけば涙なみだながるる。
 いそがしき活くわつ動どう寫しゃ真しん煤まびたる布ぬいに映うつすと、
 かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つる時、
 鄙ひなびたる鋭とがき呼よ子こそをきけば涙なみだながるる。

三十七

あはれ、あはれ、
 色青き幻燈を見てありしとき、
 なになればたづきなく、かのごとも涙なみだながれし
 いざやわれ、倶楽部にゆき、友をたづね、
 紅くはなのトマト切り、ウキスキイの酒や呼よばむ、
 ほこりあるわかき日のために。

三十八

瓦斯の火のひそかにも聲たつるとき、
 われ、君を悲しとおもひ、
 靴ぬぎの皮に
 踵なる土踏みなすり、
 別れ来て、土踏みなすり、
 ほの黄なるしめり香の、かの苑の香を嗅げば、
 いまさらに涙ながる……

三十九

忘れたる、
 忘れたるにはあらねども……
 ゆかしとも、戀ひしともなきその人の
 なになればふともかなしく、
 今日の日、薄暮のなにかさは青くかなしき。
 忘れたる、
 忘れたるにはあらねども……

四十

つねのごと街をながめて
 ナイフ執りフオク執り、女らに言葉かはせど、
 色赤きキエラソオの酒さかづきにあるは満たせど、
 かなしみはいよいよ去らず、
 かにかくにわかき身ゆゑに涙のみあふれいでつつ。

四十一

かかるかなしき手つきして、
 かかる音にこそ弾きにしか、
 かかるかなしきその日の少女。

四十二

あかき果は草に落ち、

露に濡れて、

日をひと日戦きぬ、かくてまた香だに立て得じ。

雨霽れて、日の射せば、甘く、かなしく、

物求食り、物求食り、寄りも来る音の

レグホンの雄の鶏の、あはれそがけたたましさよ。

四十三

葬式の歸途にか、戯れに笛吹き鳴らし、

もの甘き露の内さざめきてたどる樂師よ。

哀れ、汝ら、

薄ぐらき路次の長屋にひと時の後やあるらむ。

さはれなほ吹き鳴らし吹き鳴らし長閑に消えつつ、

うら若き服の鄙びのいろ赤く、なにか眺むる。

日はしばし夢の世界に目を放つ、黄金の光……

四十四

顔のいろ蒼ざめて
 ゆめ見るごときまなざし眼眸
 今日もまたわかき男、
 空をのみ空をのみ見やりて暮らす。

四十五

長き日の光に倦うみて
 熟うれし木の果は
 やはらかき吐息もて地にぞ落ちたる。
 またひとつ……そよとだに風も吹かねど。

四十六

かなしかりにし昨日きのさへ、
かなしかりにし涙さへ、
明日あすは忘れむ肥ふと滿れる君よ。

四十七

廢すたれたる園のみどりに
ふりそそぎ、ふりそそぎにはやかに小雨はうたふ。
罌粟けしよ、罌粟よ、
やはらかに燃えもいでね……………

四十八

なにゆゑに汝は泣く、
 あたたかに夕日にほひ、
 たんぼほのやはき溜息野に蒸して甘くちらぼふ。
 さるを女、
 なにゆゑに汝は泣く。

四十九

あはれ、人妻、

ふたつなきフランチエスカの物語
 かたらふひまも、みどり兒は聲を立てつつ、
 かたはらを匍ひもて歩りく。
 君はまた、たださりげなし。
 あはれ、人妻。

五十一

色赤き三日月、
 色赤き三日月、
 今日もまた臥床ふしどに
 君が兒は銀笛のおもちやをぞ吹く、
 やすらけきそのすさびよ。

五十

いかにせむ……………
 やはらかに
 眼も燃えて、
 ああ君は
 唇をさしあてたまふ。

五十二

柔らかなる日ざしに
 張物する女、
 いろいろの日ざしに
 もの思ふ女、
 柔らかなる日ざしに
 張物する女。

五十三

われは怖る、
 その宵のたはむれには似もやらで、
 なにことも忘れたる
 今朝の赤き唇。

五十四

いそがしき葬儀屋のとなり、
 驛^{えき}遞^{てい}の局に似通ふ兩替^{りょうがへ}のペンキの家に、
 われ入りて出づる間もなく、
 折よくも電車^{でんしゃ}ひかへて、そそかしく飛びは乗りつれ。
 いづくにか、行きてあるべき、
 ただひとり、ただひとり、指すかたもなく。

五十五

明日^{あす}こそは
 面^{かほ}も紅めず、
 うちいでて、
 あま^{あま}りりす、眩^{まぼろし}ゆき園を、
 明日こそは
 手とり行かまし。

五十六

色わかきデカメロンの
書に肱つき、

なにごとをか思ひわづらひたまふ。

わかうどの友よ、

美しきかかる日の夕暮に、さは疎くたれこめてのみ、
なにごとをか思ひわづらひたまふ。

五十七

あはれ、鐵雄、

静かなる汝が顔の蒼さよ、

聲もなきは泣きやしつる、

たよりなき闇の夜を

光りて消ゆる花火に。

五十八

ほの青く色ある硝子、
透かし見すれば
内部なる耶蘇の龕みくらにひとすぢの香かぐたちのぼる。
街まちをゆき透かし見すれば
日の眞晝ものの静かにほのかにも香たちのぼる。

五十九

薄青き齒科しよくわい醫の屋いに
夕日さし、
ほのかにも硝子は光る。
あはれ女、
その戸いでていつちにかゆく……
黄なる陽ひに汝なを見れば
われもまたほの淡き齒痛をおぼゆ。

六十

あはれ、あはれ、
 灰色の線路にそひ。
 ひとすぢの線路にそひ、
 今朝もまた辿りゆく浅葱服のわかき工夫、
 汝もまた路のゆくてに
 青き花をか求むる、
 かなしき長さあゆみよ。

六十一

新詩社にありしそのかみ、
 などてさは悲しかりし。
 銀笛を吹くにも、
 ひとり路をゆくにも、
 歌つくるにも、
 などてさは悲しかりし、
 をさなかりしその日。

六十二

『かくまでも、かくまでも、
わからどは悲しかるにや。』

『さなり女をんな、

わかき日には、

ましてまた才さいある身には。』

六十三

かかる窓まどありとも知らず、昨日きのうまで過ぎし河岸かはぎし。
今日けふは見よ、

色赤あかき花はなに日の照あり、かなしくも依依ええ兒こ匂におふ。
わはれまた病やめるピアノも……………

六十四

わかうどのせはしさよ。
 さは昨日世をも厭ひて重格魯密母求めて泣きしか、
 今朝ははや林檎吸ひつつ霧深き河岸路を辿る。
 歌樂し、鳴らす木履に………

六十五

夕暮のものあかき空
 その空に百舌啼きしきる。
 ウキスキイの儼の列
 冷やかに拭く少女、
 見よ、あかき夕暮の空、
 その空に百舌啼きしきる。

六十六

夕日はなやかに、
 こほろぎ啼く。
 あはれ、ひと日、木の葉ちらし吹き荒みたる風も落ちて、
 夕日はなやかに、
 こほろぎ啼く、

六十七

美しくしきソフィヤの君。
 悲しくも戀しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君。
 なになれは日もすがら今日はかく瞑目り給ふ。
 美しくしきソフィヤの君、
 われ泣けば、朝な夕なに、
 悲しくも静かにも見ひらき給ふ青き華少女の瞳。
 ソフィヤの君。

六十八

失くしつる。

さはあるべくもおもはれぬ

またある日には、

探しなば、なほあることもおもはるる。

色青き眞珠のたまよ。

酒の徴

一

金の酒をつくるは
かなしき父のおもひで、
するどき歌をつくるは
その兒の赤き哀歡

からの花の實になる
 春のすゑのさみしや。
 酒をしぼる男の
 肌さへもひとしほ。

二

金の酒をつくるも、
 するどき歌をつくるも、
 よしや、またわかき娘の
 父知らぬ子供生むとも……

三

酒袋さかぶくろを干すとして

ぺんぺん草をちらした。

散らしてもよかる、

その實みとなるもせんなし。

四

酩まどすり唄のころは

わかき男の手にあり。

擻ひをそろへてやんざの、

そなた戀しと鳴らせる。

五

麥の穂づらにさす日か、
酒屋男さかやをとこにさす日か、
軽ろく投げやるころの
けふをかぎりのあひびき。

六

人の生るるもとすら
知らぬ女子をんなのころに、
誰たれが馴れ初めし酒屋の
にほひか、麥のむせびか。

七

からしの花も實となり、
 麥もそろそろ刈らるる。
 かくしてはやも五月は
 酒量ばかる手にあふるる。

八

櫛はの實探みの來る日に
 百舌も啼ずき、人もなげきぬ、
 酒をつくるは朝あけ、
 君へかよふは日のくれ。

九

ところも日をも知らねど、
ゆるししひとのいとしさ、
その名もかほも知らねど、
ただ知る酒のうつり香。

十

足をそろへて磨ぐ米、
水にそろへて流す手、
わかいさびしいころの
歌をそろゆる朝あけ。

十一

ひねりもちのほひは
わが知る人も知らじな。
頑くなのひとゆゑに
何時までひねるところぞ。

十二

徴かに消えゆくゆめあり、
酒のほひか、わが日か、
倉の二階にのぼりて
暮春をひとりかなしむ。

十三

さかづきあまたならべて
 いづれをそれと嘆かむ、
 利酒きざひすなるころの、
 せんなやわれも酔ひぬる。

十四

その酒の、その色の、にはひの
 口あたりのつよさよ。
 おのがつくるかなしみに
 囚とられて泣くや、わかうど。

十五

酒を醸すはわかうど、
 心亂すもわかうど、
 誰とも知れぬ、女の
 その兒の父もわかうど。

十六

ほのかに忘れがたきは
 酒つくる日のをりふし、
 ほのかに鳴いて消えさる
 青い小鳥のころね。

十七

酒屋の倉のひさしに
 薊のくさの生ひたり、
 その花さけば雨ふり、
 その花ちれば日のてる。

十八

計量機カンカシに身を載せて
 量るは夏のうれひか、
 薊の花を手にもつ
 裸男の酒の香。

十九

かなしきものは刺あり、
 傷つき易きころの
 しづかに泣けばよしなや、
 酒にも徴おびのにはひぬ。

二十

目ざまし時計の鳴る夜に
 かなしくひとり起きつつ
 倉ぐらを巡回まはれば、つめたし、
 月の光にさく花。

二十一

わが眠る倉のほとりに
青き光放つものあり、
螢か酒か、いの寝ぬ
合歡カッカン木のうれひか。

二十二

倉の隅にさす日は
微ほかに光り消えゆく、
古りにし酒の香にすら、
人にはそれと知られず。

二十三

青葱とりてゆく子を
薄日の畑にながめて
しくしく痛いたむところに
酒をしぼればふる雪。

二十四

銀の釜に酒を湧かし、
金の釜に酒を冷やす
わかき日なれや、ほのかに
雪ふる、それも歎かじ。

二十五

夜ふけてかへるふしどに
かをるは酒か、もやしか、
酒屋男のところに
そそぐは雪か、みぞれか。

見はてぬ夢、

泊芙藍

罇入りし珈琲碗に

泊芙藍のくさを植ゑたり。

その花ひとつひらけば

あはれや呼吸のをのく。

昨日を憎むところの陰影にも、時に顫へて

ほのかにさくや、さふらん。

見果てぬ夢

過ぎし日のしづこころなき口笛は
日もすがら葦の片葉の鳴ることく
ジブシイの晝のゆめにも顛ふらん。
過ぎし日のあどけなかりし哀愁は
こまやかに匂^{にほひ}シヤポンの消ゆるごと

目のふちの青き年増^{としま}や泣かすらん。
過ぎし日のうつつなかりしためいきは
淡^{うす}ら雪赤のマントにふるごとく、
おもひでの襟のびろろど身にぞ沁む。
吹き馴れし銀^{ぎん}のソプラの身にぞ沁む。
過ぎし日の、その夜^{よる}の言はで過ぎにし片おもひ。

初戀

薄らあかりにあかあかと
踊るその子はただひとり。
薄らあかりに涙して、
消ゆるその子もただひとり。
薄らあかりに、おもひでに、
踊るそのひと、そのひとり。

あかき林檎

いと紅^{あか}き林檎の實をば
明日こそはあたへむといふ。
さはあれど、女の友は
何時^{いつ}もそを持ちてなかりき。
いと紅^{あか}き林檎の實をば
明日^{あす}こそはあたへむといふ。

水蟲の列

朽ちた小舟の舟べりに
赤ら列なみゆく水蟲よ、
そつと觸さればかつ消えて、
またも放せば光りゆく。

カステラ

カステラの縁ふちの澁しぶさよな、
褐色かっしやくの澁しぶさよな、
粉こなのこぼれが眼まなこについてね、
ほろほろと泣なかるる。
ほんに、何なにとせう、
赤い夕日に、うしろ向むかいて
ひとり植うゑた石竹。

ふるさと

人もいや、親もいや、
 小さな街が憎うて、
 夜ふけに家を出たれど、
 せんすべなしや、霧ふり、
 月さし、壁のしろさに

こほろぎがすだくよ、
 堀の水がなげくよ、
 爪さき薄く、さみしく、
 ほのかに、みちをいそげば、
 いまだ寝ぬ戸の隙より
 灯もさし、菱の芽生に、
 なつかし、沁みて消え入る
 油搾木のしめり香。

瞬間たまたまにほのぼのとくちつけて
 消えにしを、落ちにしを、その一夜ひとよ。
 さるになど光ある御空より
 君はまた香かを求め泣き給ふ。
 わな、あはれ、その一夜、泣きにしは
 君ならじ、そのかみのわが少女。

泣きにしは

美はしき、そは兎とまれ、人妻よ。
 ほのかにも唇くちびるふれて泣きにしは、
 君ならじ、我ならじ、その一夜ひとよ。
 青みゆく蠟ろうの火と月光と、
 儼すえてゆく無花果と、日のかげと、

時は逝く

時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく、
穀倉の夕日のほめき、
黒猫の美しくしき耳鳴のごと、
時は逝く。何時しらず柔かに陰影してぞゆく。
時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

片戀

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

かはたれの秋の光にちるぞえな。

片戀の薄着のねるのわがうれひ

「曳舟」の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息のちるぞえな。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。
ひとが泣かうと泣くまいと
なんのその葉が知るものぞ。

ひとはひとゆゑ身のほそる。
芥子がちらうとちるまいと、
なんのこの身が知るものぞ。
わたしはわたし、
芥子は芥子、
なんのゆかりもないものを。

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、
 昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。
 鳴きそな鳴きそ春の鳥、
 歌澤の夏のあはれとなりぬべき
 大川の金と青とのたそがれに。
 鳴きそな鳴きそ春の鳥。

あらせいとう

人知れず袖に涙のかかるとき、
 かかるとき、
 あらせいとうのたねを取る。
 ひとり泣いてはたねを取る。
 あかあかと空に夕日の消ゆるとき、
 植物園に消ゆるとき。

あひびき

八月の傾斜面スロウプに、

美しき金きんの光はすすり泣けり。

こほろぎもすすりなけり。

雑草みどりの縁みどりもともにすすり泣けり。

わがこころの傾斜面スロウプに、

滑りつつ君のうれひはすすり泣けり。

よろこびもすすり泣けり。

悪縁あくえんのふかき恐怖おそれもすすり泣けり。

八月の傾斜面スロウプに、

美しくしき金きんの光はすすり泣けり。

あそびめ

たはれをのかずのまにまに
 じだらくにみをもちくづし、
 おしろいのあをきひたひに
 ねそべりてひるもさけのみ、

さめざめとときになみだし、
 ゆふかけてさやきいづとも、
 かなしみはいよよおろかに、ながねひきいよよつめ
 たし。
 あはれよのしろきねどこの
 まくらべのベコニヤのはな。

う
つ
そ
み

罪びと

光りかがやく槍ぶすま、
素肌すはだにうけて身じろがね、
あまりにそそぐ日の光、
あはれみたまへと目をつぶる。

野晒

死なむとすればいよいよに
命戀しくなりにけり、
身を野晒のざらしになしはてて、
まことの涙いまだ知る。

人妻ゆゑにひとのみち
汚しはてたるわれなれば、
とめてとまらぬ煩惱ぼんぼうの
罪のやみぢにふみまよふ。

なまじおもへば

なまじおもへばいよいよに
光りつめゆくわがいのち。
いなさ細江ほそえのみをつくし
光りつむれば日もつまる。

涙

常住じやうちゆうだん不斷のかなしみに
ながるるものはわが涙、
常住不斷のよろこびに、
こぼれ落つるもわが涙。

眞實

眞實なりと誰かいふ、

眞實ならずと誰かいふ。

麗らかなれども、また寒く、

水は樋をこそすべるなれ。

自愛

眞實心ゆゑあやまられ、

眞實心ゆゑたばかり。

しんじつ口惜しとおもへども、

しんじつ此身が棄てられず。

二人で居たれど

二人で居たれどまだ淋し、
 一人になつたらなほ淋し、
 しんじん二人は遣瀬なし、
 しんじつ一人は堪へがたし。

幻滅

眞まことと見しは影なりき、
 鏡の中の百合の花
 現身うつしみながら夢なりき、
 晝なりけれど夜よるなりき。

肖像

あたり眩まぼゆきわが姿、
ふつと寂しくなる時は、
鏡に影のみのこし置き、
眞まことの己おのれは飛び去りぬ。

ふたつの鏡

いづれが影か、かがやかに、
いづれが眞まことえもわかぬ。
鏡を鏡と照りあはせ、
光りてをのくわがこころ。

現

現うつつに醒さめて、麗うららかに
 物思ふこそうれしけれ。
 現うつつ身みならで知りがたき
 このよろこびを泣なきてよろこぶ。

巡
禮

眞實まこと諦あきらめ、ただひとり、
 眞實一路の旅をゆく。
 眞實一路の旅なれど、
 眞實、鈴すずふり、思おもひ出す。

薔
薇
の
木

薔薇の木

薔薇の木に、
薔薇の花さく。

なにぞとの不思議なけれど。

光あふるる蔦かづら、
ゆりうごかすは日の光。
ただ日の光、日のしづく。

二

日 光

一

兩掌もろてそろへて日の光掬すくふ心ぞあはれなる
掬へど掬へど日の光、
光りこぼるる音もなく。

佇 立

海まんまんとうねれども、
不二れいろうとおはせども、
佇たやすむものはわれひとり、
こぼるるものはわが涙。

麗日展望

麗らかや、
見わたせば帆かけふね、
玲瓏と不二ふじのみね。

ながるるみづはいつしんに
 ひかりみなぎりをどりゆく。
 いつほんかかるとるきばし、
 うをはそのへをとびこゆる。

ながは

やさい

ぎんのさかなのとびはぬる
 やさいばたけにきてみれば、
 ぎんのさかなをとらへむと、
 やさいあはててはをみだす。

ながめ

かがやくものはみなきえぬ、
 きえたるものはまたひかる、
 ひかり、きえ、
 きえ、ひかり、
 ひかりつきせずしよんがいな。

か
ぜ

かぜふく、きえしかがやきを、
 ふきそよがしてひかりゆく、
 のはらいちめんかがやかに、
 てりかがやかし、わすれゆく、

つなで

ひかりかたまりなきまるび、
をんなこどもはなにすとか、
をんなこどもはつなでひく、
かがやくうみをばひきあぐる

海 雀

うみすずめ うみすずめ
海雀、海雀、

ぎん 銀の 點點、海雀、

波ゆりくればゆりあげて、

波ひきゆけばかけ失する、

海雀、海雀、

ぎん 銀の 點點、海雀。

大正四年四月廿八日印刷
大正四年五月三日發行

定價金九拾五錢

著作權
所有

著者

北原白秋

發行者

東京市麻布區坂下町十三番地
北原鐵雄

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
淺野榮作

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所

東京市麻布區坂下町十三番地
阿蘭陀書房

發賣元

東京市神田區表神保町三番地
合資會社
東京堂書店
電話本局一二三番
振替東京二七〇番

